

## レファレンス

### コーナー

#### 観光と発展途上国

石井美千子

アジアの観光開発による環境破壊、開発地から追い出されていった人々、売春問題、観光開発における日本のODAの実態報告である。

外貨収入や雇用創出などの経済効果期待できる観光産業は途上国において重要な位置を占めている。しかし、ご存知のとおり最近、観光をめぐる状況は厳しいものになっている。米国同時多発テロが起きた二〇〇一年の国際観光は一九八二年以来初めてのマイナス成長を記録した。その後も何度、渡航規制がしかれる事態があっただろうか。今年にはSARSという新たな脅威が観光産業に大きな打撃を加えている。日本は国際観光の主要送り出し国であるが、このような状況のなかで今年には海外旅行を控える人も多いにちがいない。ここで観光が途上国に及ぼしてきた影響や、望ましい観光開発のありかたを考えてみてはどうだろうか。

途上国観光開発の負の側面を取材したものに、松井やより著『アジアの観光開発と日本』（新幹社 一九九三年）がある。これは台湾や東南

世界システムの中心に位置づけられる先進国や都市住民が、周辺である「未開」や「自然」を訪れる構造を明らかにする。

研究文献では人類学の分野での成果が目立つ。山下晋司編『観光人類学』（新曜社 一九九六年）は、観光に関する「教科書のようなもの」を意図してまとめられ、植民地の文化政策としての観光、持続可能な観光開発、観光と性、民族文化の演出、観光イメージの形成とメディア等々、一五章にわたって世界各国を事例にあげて観光を考察する枠組みを提示する。写真も豊富で、親しみやすい。同じく山下晋司著『パリ——観光人類学のレッスン』（東京大学出版会 一九九九年）は、パリ島を主な事例として観光が文化生成にどのように関わっているかを描き出している。橋本和也著『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』（世界思想社 一九九九年）は、観光研究が周辺の諸々の領域をとりこんだ曖昧な領域になっていくと見え、観光を問題にする意味を問い直す。著者が導き出した観光の定義は「異郷においてよく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」である。この観点から観光地でいかに文化が「観光文化」として売られているか、フィジー、インドネシア、中国などの事例を通して考察する。橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化——南からの問いかけ』（世界思想社 二〇〇三年）は、

オPPERマン、観光論のケー・スン・チョンの共著で、大学、大学院レベルのテキストとして書かれた。訳者（内藤嘉昭氏）によれば初の体系的な途上国の観光研究文献である。

石森秀三編『観光の二〇世紀』（ドメス出版 一九九六年）は、一九九四年に国立民族学博物館で行われたシンポジウムの報告書。一九世紀から現代までの観光の変容、民族文化の商品化、社会主義国における観光立国、観光と売春、遺跡観光、エコツーリズムなどが考察されている。国立民族学博物館では継続して観光に関する共同研究を行っており、一九九〇〜二〇〇一年の「自立的観光の総合的研究」では従来の観光が迎える地域社会に負の影響を及ぼすことが多かったことをふまえ、様々な観点から地域社会主導による観光を検討した。その成果報告書として二〇〇一年に石森・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』、石森・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』、二〇〇三年に石森・安福恵美子編『観光とジエンダー』が発行されている。

経済学においては観光研究の方法論が検討されている段階のようである。M・T・シンクレア/M・スタブラー著『観光の経済学』（学文社 二〇〇一年）は、観光の研究に有効な分析手法を検討するとともに、分析すべき課題を提起する。途上国の状況にも目が行き届いている。

『途上国観光論』（学文社 一九九九年）は、観光地理学者マーチン・

島川崇著『観光につける薬——サステイナブル・ツーリズム理論』（同友館 二〇〇二年）は書名から察せられるとおり一般読者向けの語り口だが、最近の新しい観光の諸概念を明確に整理し、説得力のある「持続可能な観光」論を展開する。インモラルなものは諸々の問題を引き起こし、結果として不経済であり持続可能性がないとして、売春、カジノ等を批判しているのは注目される。

エコツーリズムは持続する開発を可能にする環境にやさしい観光の形態として提唱されている。エコツーリズムの沿革や各国の現状などを客観的にまとめたものに、小方昌勝著『国際観光とエコツーリズム』（文理閣 二〇〇〇年）がある。前述のいくつかの本でもその意義や課題を論じているが、かえって自然破壊が進むといった負の事例も報告されている。地域社会の利益を総合的な観点から配慮した取り組みが望まれる。

（いしい みちこ／図書館図書整備課長）